

国立がん研究センター

東 病 院



薬でがんを治す未来へ

—患者さんと共に歩む軌跡

消化管内科長

設楽 紘平 医師

したら こうへい

2002年東北大学医学部卒

2012年国立がん研究センター東病院、2017年より現職。先端医療科、先端医療開発センター

—新薬臨床開発分野 併任

医療の進歩により、がんは「克服を目指せる病気」へ

と変わりつつあります。私はこれまで、胃がんをはじめとする消化器がんの新薬開発の第一線に身を置きながら、何よりも患者さんの心に寄り添い続けることを大切に歩んできました。

1. 「薬でがんを治したい」— 原点にある決意と新薬開発への挑戦

がんの薬物療法を専門にしようと決めたのは、学生時代のことでした。きっかけは、テレビ番組で目にした、がん患者さんたちによる署名活動です。米国で承認されている優れた治療薬が、日本では承認の遅れ（ドラッグラグ）により使えないという現実を前に、切実な訴えが集められていました。「1日も早く、目の前の患者さんに有効な新薬を届けたい」。このとき覚えた強い違和感と想いが、私の医師人生の原動力となりました。

最先端の新薬開発に携わるため、実績を重ねて2012年に国立がん研究センター東病院へ着任。特に胃がん領域において、がん細胞の増殖に関わる特定の分子を狙い撃ちする「分子標的薬」や、免疫の力を利用する「免疫チェックポイント阻害剤」など、世界をリードする複数の画期的な新薬開発に大きく貢献できたことは、研究者としての私の誇りでもあります。

2. 世界を驚かせた、10年の時を経た「リベンジ」

医師4年目の2007年、初めて参加した海外の国際学会での苦い経験があります。高名な英国人医師の発言に対し、私はフロアから「日本では一生懸命治療しているからです！」と反論しましたが、当時は鼻で笑われてしまいました。

その10年後__状況は大きく変わります。2017年、同じ地で開催された学会で最先端の新薬研究成果を発表した際、偶然にも司会を務めていたのが、かつて私の言葉を鼻で笑ったその医師だったのです。発表後、彼から「素晴らしい発表をありがとう！君のスライドが欲しい」と絶賛のメールが届いたときには、10年の時を経て、日本の医療の質の高さを世界に証明できたと胸が熱くなりました。

3. 数字の向こう側にある、患者さん一人ひとりの物語

国際的な研究に身を置きながらも、私のまなざしは常に、目の前の患者さんに向けられています。数字や生存曲線（データ）だけを見ているわけではありません。その中に患者さん一人ひとりの闘病があることを忘れずに、患者さんと研究をつなぐことができる臨床医でありたいと強く願っています。私の記憶には、今も忘れられない大切な患者さんたちの物語があります。

episode

1

今でも絆が続く患者さん

標準治療が効かなくなった重篤な胃がんの男性患者さんに対し、がんの遺伝子を調べて非常に稀な変異を見つけ出し、有効な薬剤を使用したところ、症状が大きく改善し、一時は通常に近い生活を送れるようになりました。後に亡くなりましたが、学会発表の報告を聞いた奥様から「夫を学会地へ連れて行って来てくれてありがとう」と言っていたがき、今でも誕生日にメールを交わす絆が続いています。



episode

2

身が引き締まる記憶

20代の胃がん女性の治験を担当した際、一度は新薬が奏効したものの、その後悪化し、治験発表の直後に亡くなりました。私は今でも彼女を思い出すたびに、「もっと良い治療を作らなければ」と心に誓っています。

新薬に関する
研究トピックス
はこちら



胃がんに対する一次治療としての化学療法・レンパチニブ...

胃がんに対する二次治療としてのトラスツズマブ...



クローディン 18.2 陽性 HER2 陰性進行胃がんに対する...

胃がん・食道胃接合部腺がんに対する手術期治療として...



episode

3

治る素晴らしさを知った原点

医師3年目のとき、ステージ4の多発肝転移を伴う胃がん患者さんを担当し、薬物治療と手術で完全な治癒に至りました。約10年後、その方の娘さんの結婚式に家族と同じテーブルで招待され、「薬でがんが治るとは、なんて素晴らしいのだろう」と心震えた瞬間は、今も私の原点です。

4. あなたと共に、諦めない治療を

これまで、ステージ4や切除不能と言われた進行胃がんの状況から、薬物治療によって根治（完治）へと至った患者さんを50人以上も経験してきました。「もっともっと、薬で治せるようにしたい」—それが現在の私の、そしてがんセンター全体の切なる目標です。

がんという病気は依然として厳しく、長い闘病を余儀なくされることも少なくありません。しかし、医療の世界では、昨日まではなかった新しい薬や治療法が、世界中の研究者や医師たちの手によって日々、確実に生み出されています。

「もう手立てがない」と感じるような状況であっても、未来を切り拓く新薬開発の挑戦は決して終わりを迎えることはありません。臨床の現場で目の前の患者さんが良くなることの喜びを胸に、私と医療チームは、今日もあなたと共に病の克服を目指して歩み続けています。